

# 吃音とclutteringの鑑別診断用 チェックリストの開発

目白大学 保健医療学部 言語聴覚学科

宮本昌子

# はじめに

- clutteringは発話速度の異常、吃音とは異なるタイプの非流暢性症状により、発話が不明瞭となる障害である (St. Louis et al., 2007).
- 吃音と鑑別するチェックリストを開発することで、clutteringによる非流暢性症状を改善させるためのアプローチが可能になると考える。
- 日本で適用可能なclutteringを鑑別するチェックリストの作成が必要である。

# 研究の目的

「日本語版clutteringチェックリストver.2」の適用可能性を検討するために以下のことを目的とした。

研究1. 上記チェックリストを吃音を主訴とし指導を受けている子どもを対象として実施し、得点の分布や合併している障害等の実態を把握する。

研究2. 上記チェックリストでclutteringに該当した児童に対する治療介入を行い、効果を検討することにより、チェックリスト検出の妥当性を確認する。

# 研究1：方法

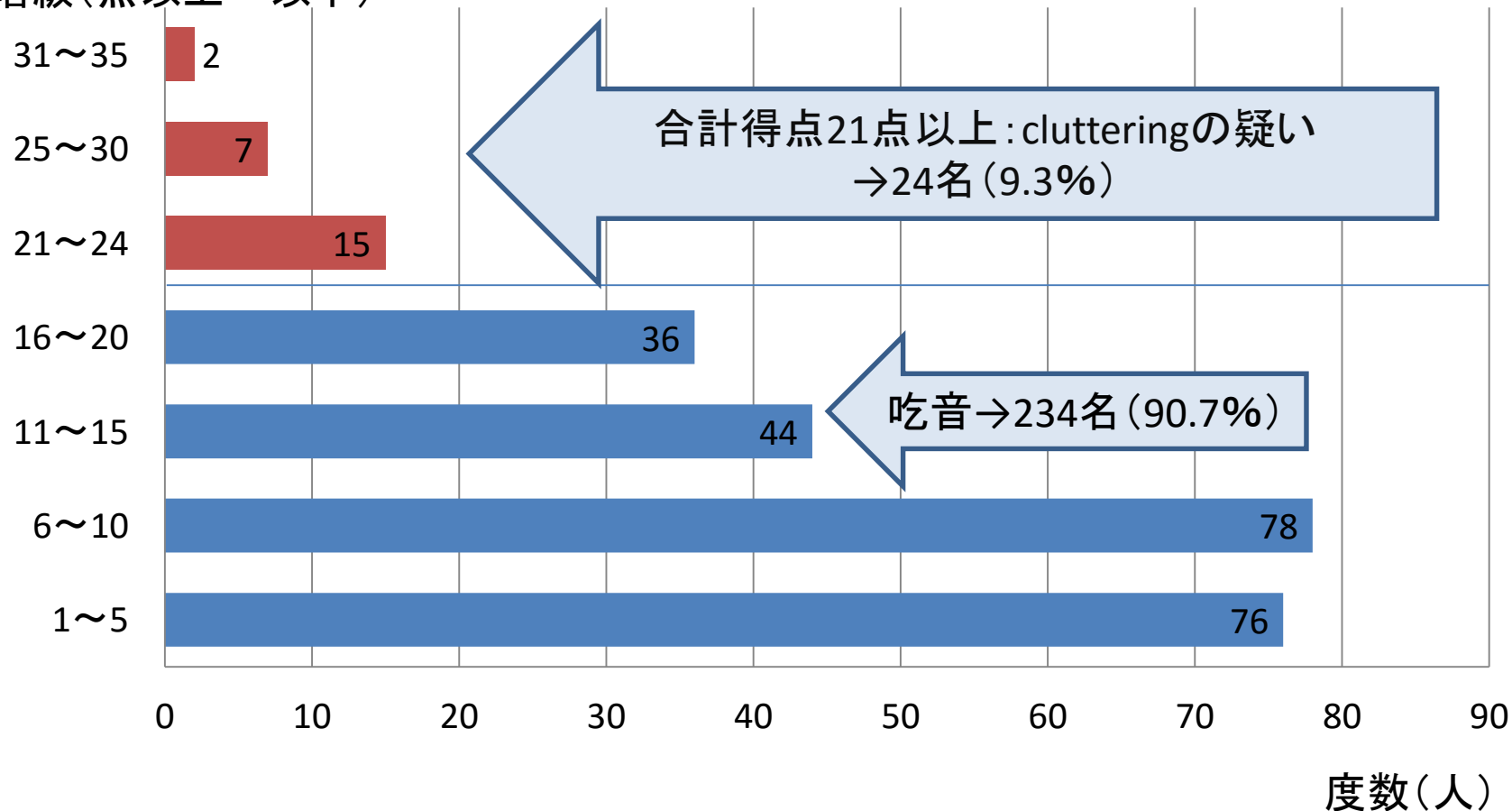
- 対象：関東地方公立小学校内言語指導教室に、吃音を主訴として通級する児童

言語指導教室（80教室）の担当教員に日本語版 cluttering チェックリスト ver.2 の実施を依頼し、該当する児童258名に対して実施。

- 実施期間：2009年3月～5月
- チェックリストの概要：吃音とclutteringを鑑別するために作成された24項目，0～2点（0点：あてはまらない；1点：あてはまる；2点：かなりあてはまる）

# 結果1：日本語版clutteringチェックリスト ver.2の合計得点の分布

階級(点以上～以下)



# 結果2: 合併する障害

Clutteringに該当する疑いのある児童24名中  
12名(50.0)%に、合併する障害に関する記載があった。  
9名(33.3)%に合併する診断名の記載があった。

学年	性別	障害名	合計得点
2	男	発達性協調運動障害	21
2	男	発達性協調運動障害	21
5	男	知的遅れ(視覚認知苦手)	21
4	男	ADDとLDの疑い	22
5	男	診断を受けていない、ADHD的	23
1	男	広汎性発達障害、構音障害	23
4	男	アスペルガー症候群	25
6	女	ADHDの疑い	25
6	男	アスペルガー(ADHDの傾向もあり)	26
5	男	3才時、高熱のため左手足にマヒ	29
4	男	知的障害	32
6	男	IQ60	35

# 結果2: 合併する障害(続き)

吃音の児童234名中  
20名(8.5%)に、合併する障害に関する記載があった。  
9名(3.8%)に合併する診断名があった。

学年	性別	障害名	合計得点
4	男	軽度の知的遅れの疑い	6
年長	女	超低出生体重児MR	7
2	男	知的にはやや低い	8
2	男	知的にボーダー	8
年長	女	超低出生体重児MR	9
1	男	知的遅れ(境界域)、構音障害	11
1	女	ことばの遅れの疑い	11
6	男	知的障害	11
1	男	落ち着きがない。障害名はなし	13
4	男	ADHD	13
6	男	PDD	14
5	男	てんかん	14
3	男	PDD	15
年長	男	発達性協調運動障害疑い	15
6	男	低学年の頃、ADHDの特性を顕著にもっていた	18
中2	男	ADHDの疑いあり	18
3	男	他の病気で口の周囲の筋力が弱い、アスペルガーの疑い	18
2	男	境界? LD	18
2	男	LD(読み書き障害)	20
3	男	言葉の遅れ、IQボーダー	20

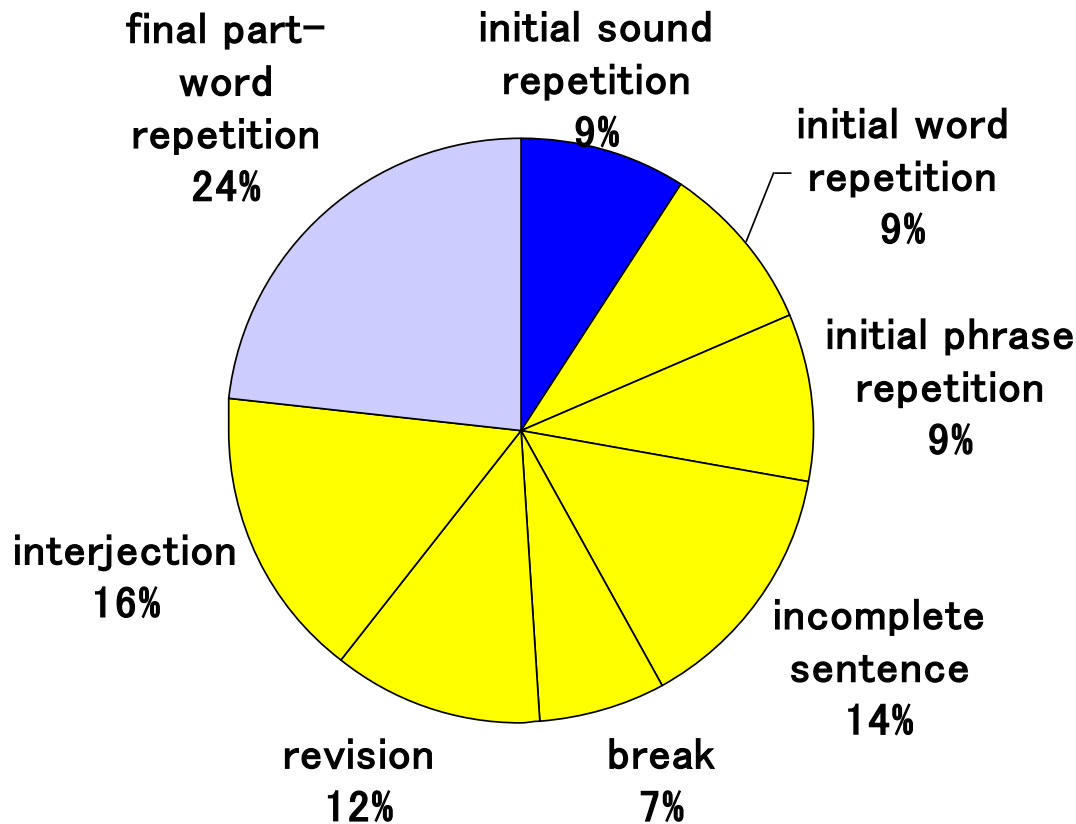
# 研究2:対象

日本語版clutteringチェックリストver.2において  
clutteringに該当した児童1名

- 年齢:7歳6か月
- 指導方法:チェックリストの結果より,言語能力の低下が顕著である「syntax type」のclutteringが疑われた。よって①語彙の増加,②構文の習得を目標とした指導を実施することにより、clutteringの特徴である非流暢性症状の改善を目指した。
- 指導期間:2010年3月～2011年3月まで



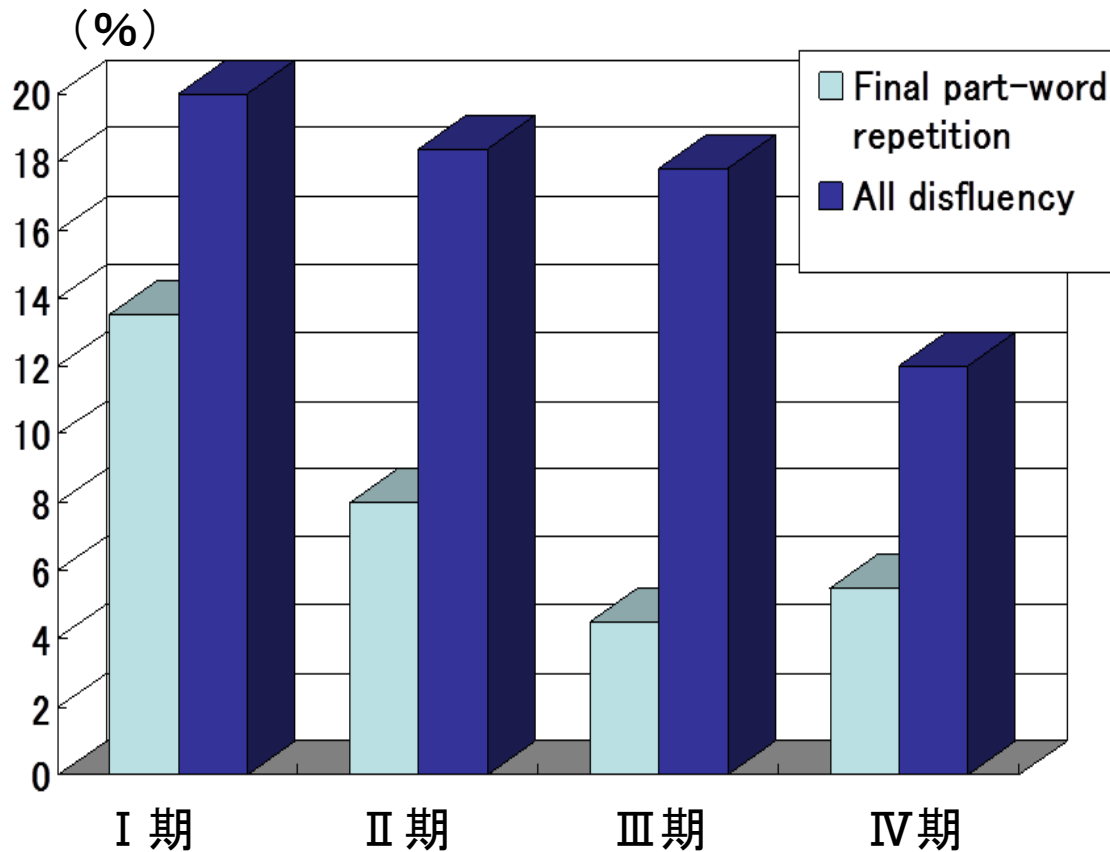
# 非流暢性症状の評価



特徴: いわゆる語頭音の繰り返しより、語尾の繰り返しの頻度の割合が高いことから、非流暢性症状の背景に、統語的な困難さが想定される (McAllister & Kingston, 2005)

非流暢性タイプ別の生起頻度の割合

# 結果



非流暢性頻度：生起頻度/文節数

語尾の繰り返し、すべてのタイプの非流暢性、両方において、I期よりIII期にかけて頻度の低下がみられた。

非流暢性頻度の推移

# 考察とまとめ

## 【研究1】

本チェックリストでclutteringが疑われる児童は9.3%であった。→先行研究で報告された吃音に混在するclutteringの割合が約10～20%である(miyamoto,2011)。また、clutteringが疑われる群の方がより高い割合で他の障害を合併していた。

## 【研究2】

本チェックリストで検出されたclutteringが疑われる児童を、発話症状を改善する目的で行った治療介入により、非流暢性頻度が低下したことから、チェックリストでの鑑別は妥当であることが確認された。

# 文献

- St.Louis, K. O., Myers, F.L. ,Bakker, K., & Raphael,L.J. (2007):Understanding and treating cluttering. In E.G. Siegel(Eds.), Stuttering and related disorders of fluency(3<sup>rd</sup> ed.).New York:Thieme.
- McAllister, J. & Kingston,M.(2005): Final part-word repetitions in school-age children: Two case studies. Journal of Fluency Disorder, 30, pp255-267.
- Miyamoto,S.(2011): Assessment and intervention of Japanese children exhibiting possible cluttering. In Ward, D & Scaler Scott(Eds.),Cluttering. New York: Psychology press, pp198-210.